

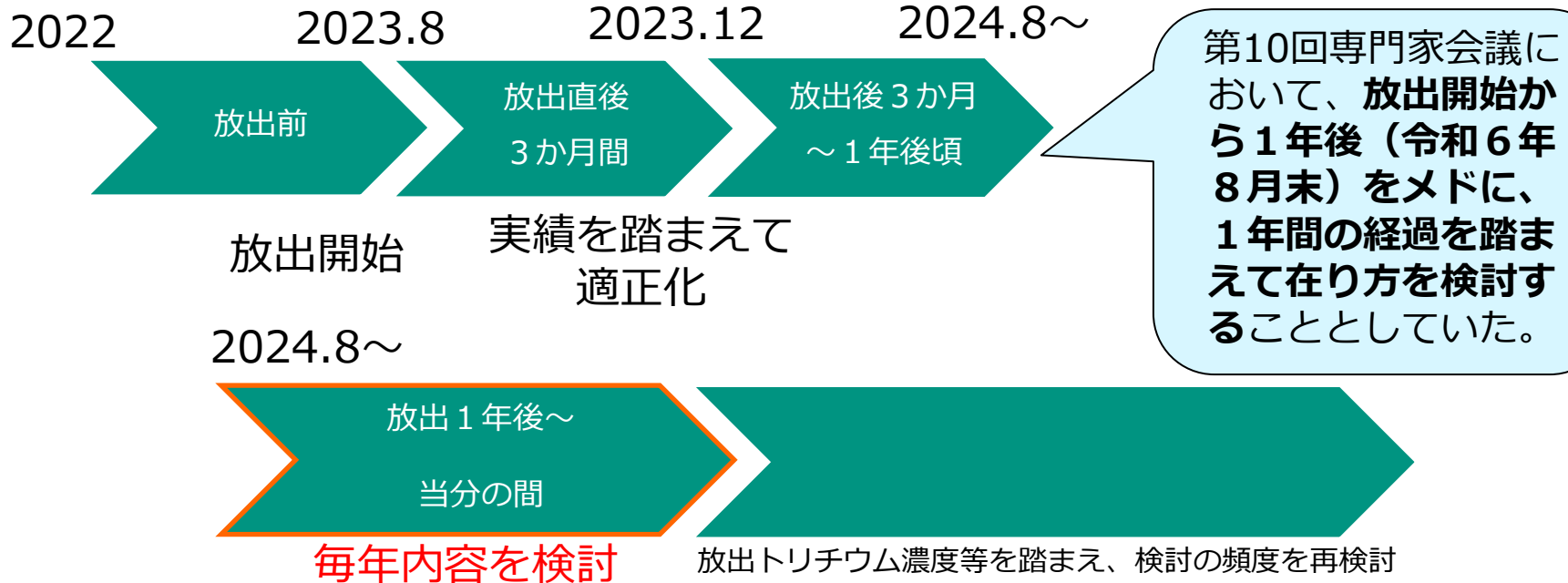


環境省の来年のモニタリングについて



モニタリングの在り方検討の進め方

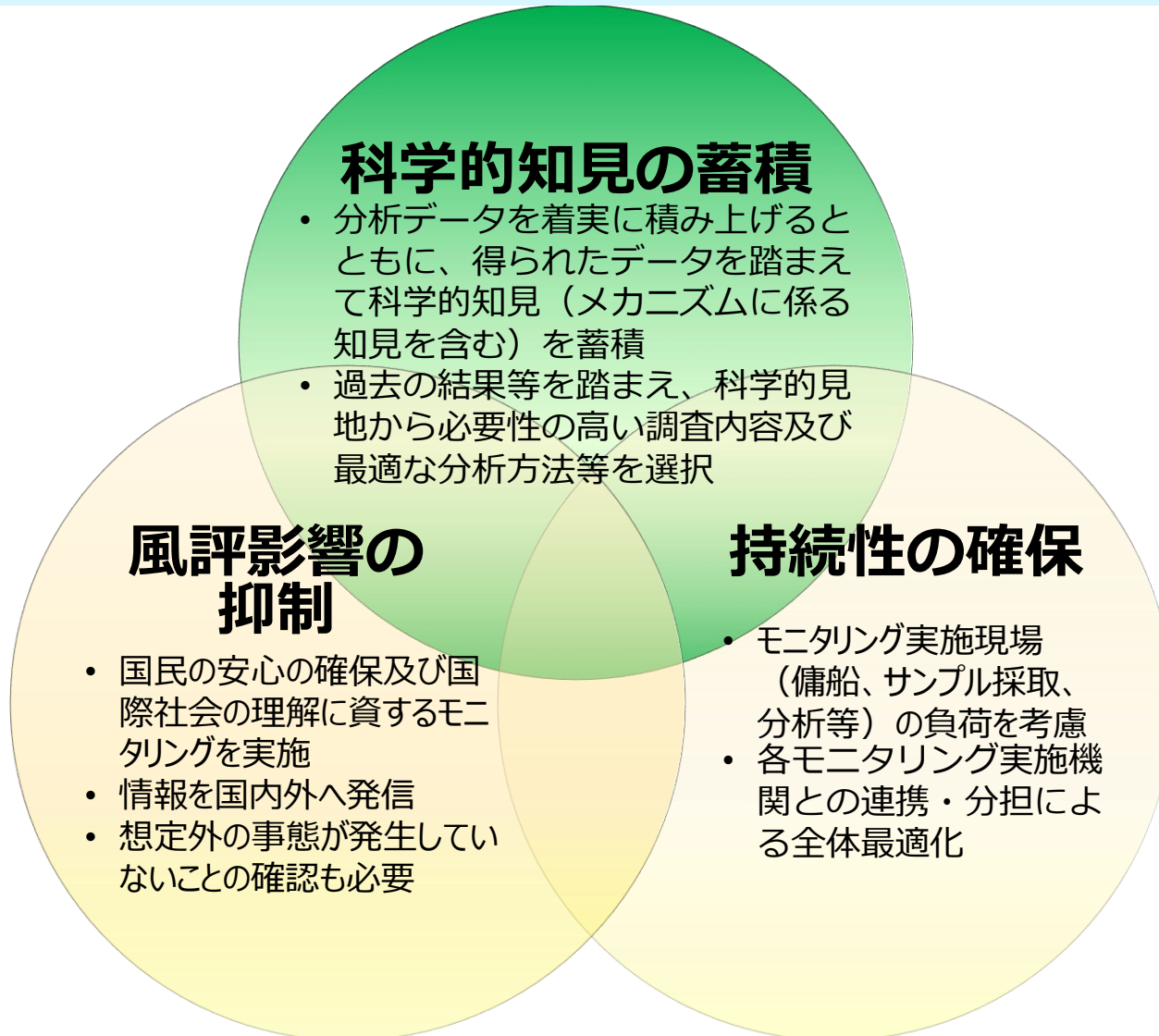
引き続き客観性・透明性・信頼性の高いモニタリングを徹底することを前提に、事業を**長期的に継続していく**ことを目指す。



- 今後、当分の間は、毎年検討を行っていく。 ※不測の事態には柔軟に対応
→当分の間、毎年検討を行い、翌年のモニタリングに反映
- 放出トリチウム濃度が一定となる等、状況を踏まえ、検討の頻度についても再検討を行っていく。

モニタリングの在り方検討に関する視点

海域のトリチウム濃度の変動等を継続的に把握し、環境への影響に関する科学的な情報を公表することで、風評影響の抑制につなげることを目的に実施



来年のモニタリング（案） ※令和7年の内容から変更無し

試料	核種		測点	頻度	下限値
海水	迅速	トリチウム	3測点 (表層+1測点底層)	放出中2回 停止中月1回	10 Bq/L
			20測点(表層)	放出中1回	
		海水浴場6測点(表層)	年2回		
		γ線核種	3測点(表層)	放出中2回 停止中月1回	セシウム137: 1 Bq/L
	精密	トリチウム	29測点(表層+9測点底層)	年4回 ※うち少なくとも1回は、原則として放出停止中に実施	0.1 Bq/L
			主要7核種	3測点(表層)	年4回
測定・評価対象核種※2			3測点(表層)	年1回	※1
水生生物 (魚類)	トリチウム(FWT)		3測点	年4回	0.1 Bq/L
	トリチウム(OBT)		3測点	年4回	0.5 Bq/L
	炭素14		3測点	年4回	2 Bq/kg生
水生生物 (海藻類)	ヨウ素129		2測点	年2回	0.1 Bq/kg生

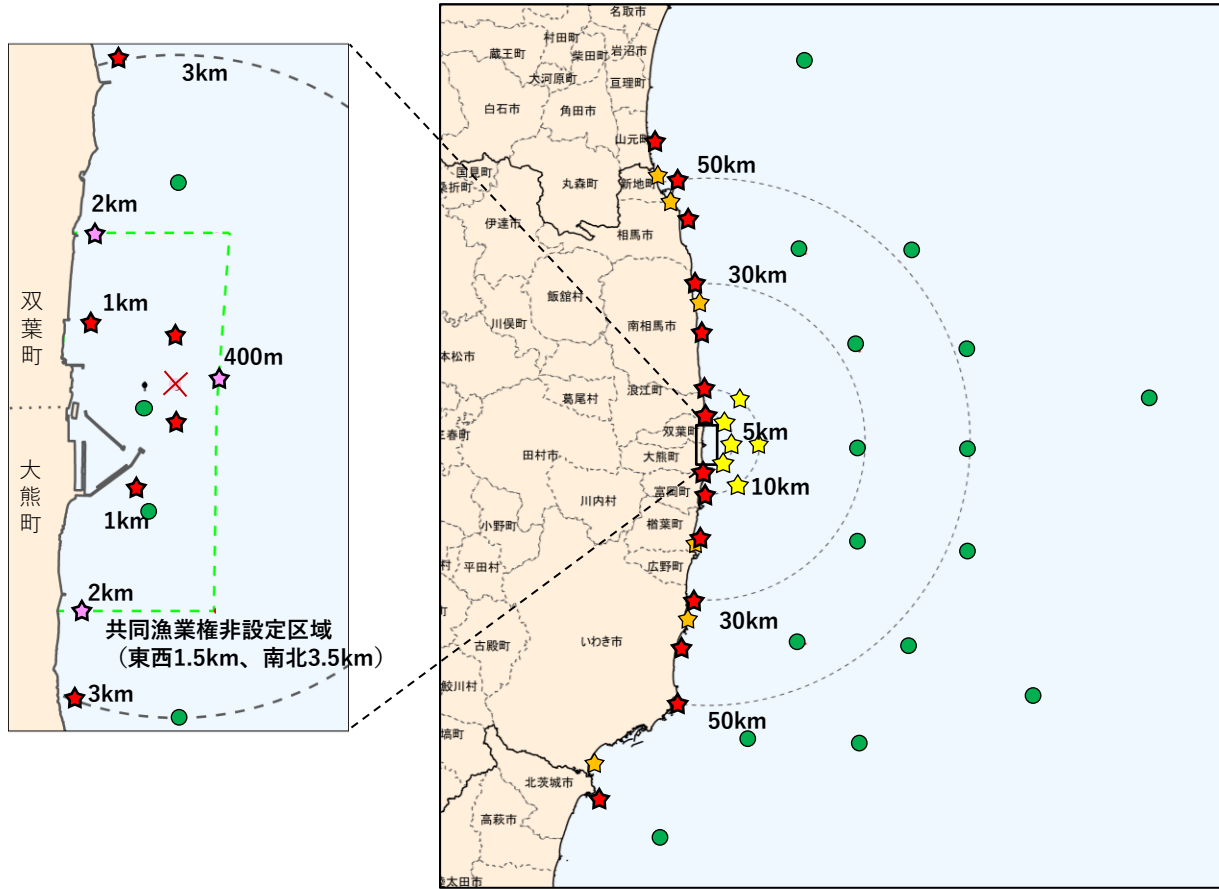
※不測の事態には柔軟に対応することとする。

※1：詳細は資料2-1別紙1を参照

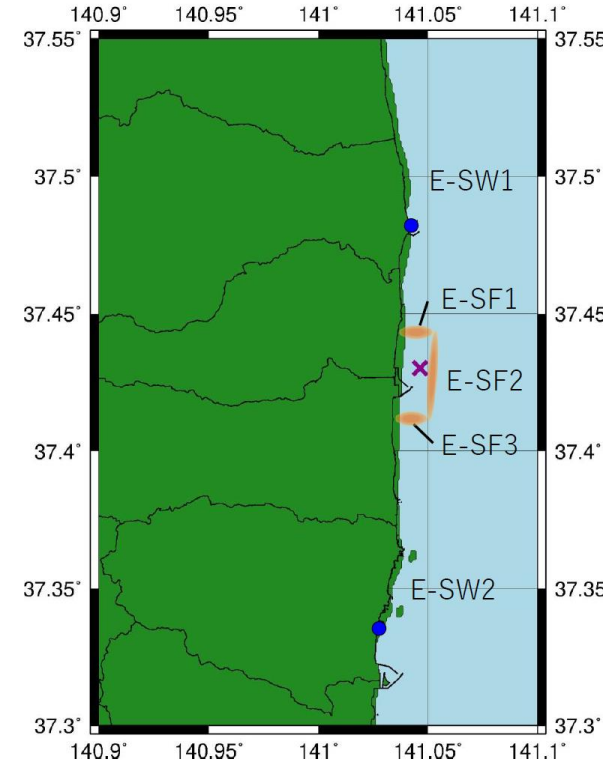
※2：核種存在比等から評価することとされている核種は、従前どおり除外

モニタリングの測定箇所

海水



水生生物



- : 魚類の採取地点
- : 海藻類の採取地点

☆★ : 環境省の測点 (計35測点)

● : 原子力規制委員会の測点 (計20測点)

☆ : 海水中のトリチウム (迅速及び精密分析)、その他の関連核種を測定 (計3測点)

★ : 海水中のトリチウムを測定 (迅速及び精密分析を実施、計20測点)

☆★ : 海水中のトリチウムを測定 (精密分析を実施、計6測点)

☆☆ : 海水浴場における海水中のトリチウムを測定 (迅速及び精密測定を実施、計6測点)

(参考) 試料サンプリング現場の様子 (イメージ)

8月8日	1班	E-S15*	E-S10*	E-S3*						
(木)	2班									
	3班									
8月20日	1班	E-S29	E-S27	E-S16	E-S15*	E-S10*	E-S3*			
(火)	2班	E-S17	E-S18	E-S33						
	3班	E-S32								
8月21日	1班	E-S14	E-S13	E-S5	E-S4	E-S1	E-S22	E-S20		
(水)	2班	E-S34	E-S19							
	3班									
8月23日	1班	E-S35	E-S30	E-S36	E-S31					
	2班									

備船計画・調整

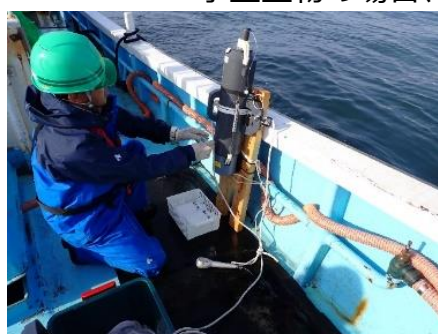


現地入り・安全ミーティング



出港・試料採取準備
1 調査あたり、

調査船 (放出時11隻、四半期最大17隻)
+ 監視船 (放出時11隻、四半期最大14隻)
水生生物の場合、前日に刺し網を張る必要



試料採取 (最大3日/ 1 調査)

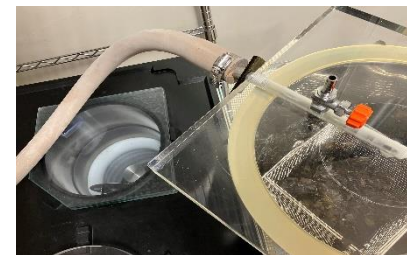
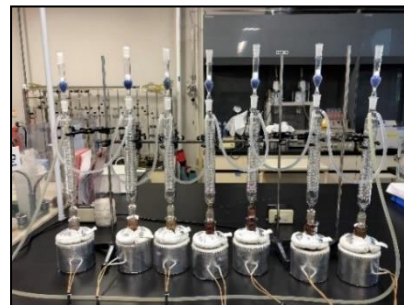


帰港・荷揚げ・試料固定・発送

(参考) 試料分析現場の様子 (イメージ)



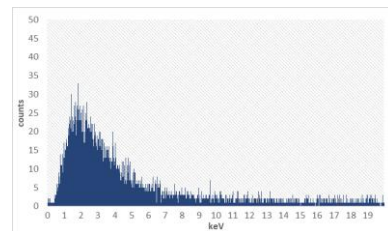
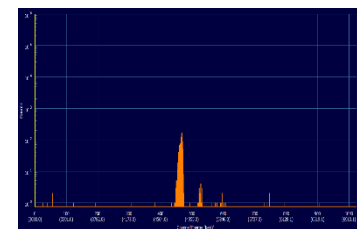
荷受け・情報登録



前処理



分析



データ解析・評価

- α線スペクトロメトリ : 6台
- 液体シンチレーションカウンタ(JCAC分) : 8台(アロカ社製)、2台(PerkinElmer社製)
- γ線スペクトロメトリ : 12台
- ICP質量分析器 : 2台

試料採取から結果の公表までの時間

トリチウム : 約10日 (迅速) 約2ヶ月 (精密)、主要7核種 : 約2ヶ月、その他54核種 : 約4ヶ月

水生生物トリチウム : 約3ヶ月、水生生物C-14 : 約4ヶ月、水生生物I-129 : 1.5ヶ月